

## 表札を閉づ

染谷 秀雄

十一月中旬になり暦どおり急に冷え込んできた二の酉の朝、玄関ドアを開けると芳香を放っている柗の花が咲いているのに気が付いた。それも近来に無い程たくさん咲いている。春先には八年前に買った利休梅がようやく純白の花を咲かせ始め、秋には梅擬が真っ赤な実をぎっしりと付け、今までいくらかも咲かなかった銀木犀がたくさん咲いた。そして柚子も近年になく大きな実を付けた。それぞれが樹齢を重ねて成木になってきたのかと思う。この地を去るにあたってこれらをみんな置いていかなければならないと思うと至極残念な思いでもある。

区役所への転出届、郵便局への転送手続、銀行への年金口座解約、NHK、東京電力、水道局等々と必要な手続きを終え、最後の洋服ダンスなどの大きな粗大ゴミを出し終わると、家の中が急に広々としてきてしまった。だが本だけはまだたくさんある。かなり処分したがまだ捨てきれないでいる。事前の梱包には五人のスタッフがやって来た。

みるみるうちに段ボールに梱包されていく。その数はおよそ二百三十個ほどとなった。引越業者の梱包・積み込みが二日間にわたった。そしていよいよ誉田の地、最後の時がやってきた。昭和五十四年三月から四十二年八月間住み慣れた家を去る時が遂にやってきてしまった。表札の名前をしっかりと封じた。電気を切り、水道を切り、不動産屋に鍵を渡した。

もうこの家に入ることとは出来ないと思うと急に胸が熱くなった。